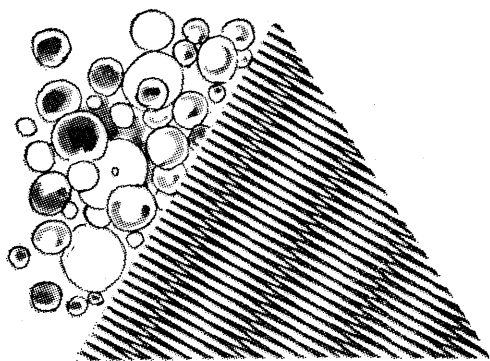


若いお母さんたちへ

はるにれの会 川 上 美 子



はじめに

この原稿を依頼された時、実際のところ、他の人に読んでいただけるようなものができるとは自信がなかった。しかし、これを機会に自分のこと、子ども達のことをふりかえてみようと思い、思い切ってお引き受けた。しかしなかなか原稿を書く気持ちにはなれなかった。私なりに頑張った子ども達と生活しているつもりでも、一日が終ると充実感というより疲労感が大きい。長男Tは三歳四ヶ月、次男Hは十ヶ月である。子ども達それぞれに手がかかり、日中はごちゃごちゃした生活である。今現在の状態をそのまま受け止め、時が経てば成長するという

心のゆとりがなかった。育児疲れだったのだろう、なんとなく育児に対し心細く心の揺らぐ日々だった。公共の場でも、いつもの家の姿でTが行動すると、まわりの人に注意される。いろんな人に、注意されたり教えられたりするのはいいことだと思いつつも、私の育て方が野放図すぎたかなと思えたりもする。また公園で楽しそうに子どもと遊んでいるお母さんを見ると、自分がいかにも冷めているように感じられる。

この原稿が出来上がる過程は、私自身を見つめなおし、忙しい育児の中で自己を確かめる過程であった。とにかく、心のありのままを見つめようと心に定めた。これは私が保育を考える原点である。

一、水戸旅行

四月上旬のある日、私はふと、心の通じ合える友人に会いたい気持ちにかられた。それで、水戸郊外にいる私の友人と何度か訪問したことのある、水戸に住む主人の友人のお宅へ伺う計画を立てた。家族旅行ははじめて

で、十ヶ月の赤ちゃんを連れ出すのは少し早い気もする。しかし、私のアイデンティティーを求める、必然的な心の欲求だった。二泊三日の短い旅行であったし、次男Hが常にガサガサしていて手はかかったけれど、自分が揺いでいた私にとって、新鮮な体験であった。日常生活から脱け出た解放感があった。しかしそれ以上に、この旅行で会った人のさりげない好意と、その人の生き様からにじみ出る言動に、私は多く学ばされ、私自身をみつめなおすことができた。

(1) 主人の友人Kさん夫婦

Kさんは茨城県庁に勤めるかたわら、陶芸の道を歩んでいる。陶芸の道で知り合われた奥さんとの間に小学校に通う三人のお子さんがおられる。以前会った時は下の女の子さんがまだ赤ちゃんの頃だった。私はその時まだ子どもがいなかった。育児にお忙しい時期であり、奥さんとゆっくり話すこともなかった。数年経てお会いし、一見して落ち着いて頼もしいお母さんという感じがした。私は小さい子どもを連れていたので、細々と心配り

をして下さった。家事も手際よく、教えられることが多くあった。草花が御夫婦で好きで、庭も自分達の好みに沿って手入れされている。食器や花器は手作りである。家中が、統一した主張が感じられる。主人の母がよく「居は心を映す」と言っているが、ほんとうにセンスのよさと人柄が感じとれる。

子ども達が寝た後、主人のもうひとりの友人もいっしょに、楽しい語らいがあった。その話の中で、保育にとっても、人間の生き方を考える上でも大切と思われる事柄が話された。そのひとつは、いいものは一年、十年と見ていると、飽きがこない。とにかくじーっと見ていると、よさがわかってくる。目利きは、すぐよいものを見分けがつくが、そうでない人は、じーっと見ることである。ふたつには、作品のよさは比較ではない。そのものらしいよさがある。人柄が表われる作品を創りたい。小さくても大きな感じさせるもの、そんなものが作りたいと言っておられた。会社では人が評価されるが、公正さが疑われ、人間的にすばらしい人よりも、むしろ表面

面のいい人、要領のいい人が評価されるそうだ。しかし、そうした人の評価で動揺することはつまらないことである。たとえ会社で出世してみても、必ず直面せねばならぬ死を迎えた時、肩書は何の役にもならない。そしてその夜の話のハイライト、Kさんのお母さんの辞世の句の話になった。Kさんのお父さんは、Kさんが小学校六年の時に病気で亡くられた。その後Kさんのお母さんは、女手ひとつで三人の息子さんを育てられた。そのお母さんが、三年前、千葉の国立病院で家族の看病の効もなく亡くなられた。亡くなられた後、かばんの中に家族の皆さんに宛てた手紙がみつかった。その手紙の最初に「したためてあったのが、次の二句であった。」

我は行く 大手をふって 主のもとへ

我が命 残り少なか 人恋し

なんとすばらしい句でしょう。主とは、神様、イエス様とも、先立たれた御主人ともとれる。大手をふって死

を迎えることのできる人生とは、なんとすばらしいでしょう。Kさんは、よく車で水戸から千葉の病院まで、お見舞いに行かれた。いつもは早く自宅へ帰るようにおっしゃるお母さんも、いよいよ死が近いと察せられ、最後は「早く帰りなさい」とは言われなかったそう。Kさんはこの句を版画にして、飾ってあった。私達も一枚いた。

(2) Aさん夫婦

翌日は、デパートで催されている陶芸展に連れていかれてもらった。その後、笠間の芸術の村で、急須だけを作っているAさんの仕事場に連れて行ってもらった。Kさんは、Aさんの作品は人柄が表われていると言っておられた。Aさんも、素朴で物静かで温かさを感じる方だった。Aさんの奥さんは、東京の本郷生まれの方で、小石川植物園が近く、草花が小さい時から好きだったと話しておられた。そして、「草花も十年経つと居心地がよくなるでしょう。しだいにふえてきました。」と言われた。私は小雨に濡れる新緑のみずみずしさと、十年経つ

たら”という言葉が印象深かった。

(3) 私の友人Mさん

二日目は、水戸の郊外にいるMさんのお宅に泊めていただくはずだった。しかし、三番目の保育園に通うお子さんが水疱瘡にかかり、Mさん夫婦が任かされている水戸の養鶏場に少しおじゃました後、Mさんと私たちと水戸で会うことにした。Mさんは、大学を卒業した後一年間キブツで生活をした。数年後、キブツで知り合われた方と結婚された。第一次産業の生活をしたと思い、今の仕事を始められた。現在一万一千羽の鶏がいて、一日に八千個卵を産むそう。畑も土地を借り、苗作りからしておられ、農業も本式である。お味噌も大豆から作られるそう。上二人のお子さんは小学校三年と一年で、通学するのに四十分歩くとのことだ。農家は子どもにたやすく物を買わせるそうで、ファミコンを持っていなのは自分のところだけだと言っておられた。お子さんがほしがらないそうで、上のお兄ちゃんは卵の選別等、役に立つ仕事をしてくれると話していた。これでいいの

かと考えることもあるそうだが、Mさんのしんの強さ、たくましさは敬服した。おいしいトマトがなる夏に、家族で会いましょうと約束して別れた。お互いに結婚十年、大学を卒業して十四年経つ。

(4)そして私

この旅行で、今の子どもとのごちゃごちゃした生活の中で忘れていた事を思い起こされた。ゆったりとした時の流れ、ゆとり、心の豊かさ等とは、程遠い生活であることに気づいた。

また、ひとつのことに打ちこんでおられる御夫婦の姿にも感銘を受けた。地道にわが道を歩んでおられ、確かに積み重ねられている。そして私……は。子ども達は疲れて眠っている。私は車に揺られながら、雨にけむる御前山に目をやった。ここは関東の嵐山といわれる美しい所であるが、八年前私は、この那珂川の清流に身を沈めて受洗したのである。私は心の源流に引きもどされたような心地がした。

二、変わりつつある長男

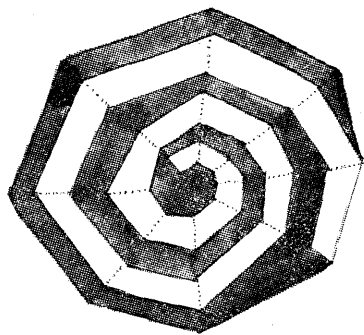
旅行によって、自分を確かめることができ、やっと日常生活や子どものことを見直す自分に立つことができた。この新しい自分の目で保育の記録を読みかえしてみた。

家でべったり母親というより、幼稚園でお友達と遊ぶ方が、長男Tにとっていいのではないかと考えた時期があった。喘息の発作に負けない体力をつけるためにも、規則正しい生活をした方がいいのではないかと考えたのである。しかし、どうしても母親と離れることが厭とTは言う。又、何人かの方に相談したら、母親とべったりいたいと思う時は案外短いものだと言われて、四月からもうやはり家でTを見ることに決めた。そう決めたからには、Tが一日を楽しく遊べるように私は心掛けようと思った。それで三月から、翌日の遊びの予想と、家事の段取りを考えてその日に臨むようにした。

雨の降らない日は極力外に連れ出した。TとHがぶつかり合うのは、たいがい家の中である。Hは九ヶ月にな

ると、動きも活発になり、Tの遊んでいる所に這ってき
てはかまう。Tは、電車の線路を組み立てて走らせる遊
び、アイロン台や板をホームにして電車を並べる遊びが
続いていたが、広い場所を使い、Hは自由にハイハイが
できない。Tは私がいる所でないと遊ばないので、別々
の所で遊ばせることもできない。Tは身の回りのことも
まだひとりできない。トイレや食事、パジャマを着る
時も、私でなくてはとごねる。人や物にぶつかると、他
人や物のせいにして怒る。Hが十ヶ月に入ると、ますま
すHも手がかかるようになった。だっこを強く求める。
いろんなものに手を出したが、それを止めさせるとギ
ャンギャン泣く。Tも、Hと同じことをやっていたが、テ
ーブルに登ったり、哺乳瓶のミルクをほしが、Hの
食事内いっしょに入りたがる。おんぶをしてやっと寝た
Hを降ろそうとすると、いっしょのふとんに入りたが
る。乳首をいやがるHに、ミルクをなんとかして飲ませ
ようとしているのに、そのミルクに横から手を出す。T
はHにちょっかいをかける。おすわりしているHを倒

す。Hをわざとひとりにさせる。やっと私から離れて遊
び出したHにいやがることをしたりすると、私のストレ
スは最高である。寝る時Tに、「どうしてHちゃんにい
たずらするの」とやばな質問をすると、「かわいいから」
と言う。Hの方もお兄ちゃんがいないと寂しがる。男の
子の兄弟ってこんなものなのでしょうか。私はへとへと



に疲れてしまう。

ところが四月の終り頃から少しTが変わってきた。四月から自由学園の幼児生活団通信グループに入った。そのせいもあるのだろうか。「おかあさん先生の言うこと聞いて」と言うと、やってくれる。朝起きるとおふとんの中から「だっこ」と言っていたのに、ある日、「ひとりで起きて来なさい」と言うと、ワンワン泣いていたが結局ひとりで起きて来る。次の日からひとりで起きて来るようになった。私がHの相手をして遊んでいると、Tはひとりで自分の遊びをする。以前ならば、「ママやって」と自分でできることも私に要求したり、Hと私の遊びにわりこんで来ていたのに。「Hちゃんこわしいいよ」と自分が作った線路をかまわせる。

五月九日は特記すべき出来事があった。私とTとHは、隣の小学校二年生のMとその友達と近所の公園へ行く。Tは私と離れて、M達とジャングルジムや雲梯で遊ぶ。しばらくして私の所へ来て、「出来たよ」と雲梯で上がって降りてくることが出来たと、うれしそうに伝え

に来た。少しして、また遠くで見ていると、小学校一年生のKに鉄棒を回るのを手伝ってもらっている。また少ししてTが公園を出ていくのが見えた。公園の入口に置いてきた車を取りに行ったのだろうと思って待っているが、なかなか姿が見えない。私はTを捜しに行くと、なんと家から砂場の道具を両手にいっぱい持って戻ってくるところだった。今までになかったことである。

ひとりで砂場でよく遊ぶ。先程のKとその弟Uとその友人Mが加わる。近所には同年令の子どもがいらないなかで、このKとUとMは、私がよく遊ぶ子ども達である。が、いつになく砂場に集中して遊んでいるので、私はもっと公園にいたかったが、おんぶしているHの咳がひどくなってきたので、先に帰ることにした。だいぶ経ってから、背中から水と砂をかけられて泣き顔でTが帰ってきた。UがダメといったことをTがしたからだと自分で言っていた。私がいないとすぐ家に帰っていたのに、画期的な出来事だった。

少しずつTが変わってきていることがわかる。これか

らどのようなのか、楽しみである。

三、何を優先するか

五月五日はHの初節句のお祝いをし、主人の母も来てくれた。ところが、ちょっとしたハプニングがあり、家の中がそうじと整理整頓ができてないと注意された。御小言を聞きながら、我ながら冷静に受けとめている自分に気づく。時おり来ては気づいたことをズバリと言う母の外からの意見は、子どもとの生活にどっぷりつかっている私にとって自分を見返す貴重な刺激である。確かに家事の中でそうじは二の次になりがちで、最少限になっしてしまう。整理整頓も頭を使う作業である。まつわりつく子どもと接しながらでは、片付ける一方で散らかり、それならいっそ子どもとつき合おうとなってしまう。子どもといううちに、居直りと、ルーズさが身についてしまった。子育ての時期は思い切って、しまってしまう方がいいと母に助言され、家中を点検してみようと積極的な気持ちになった。

夕方からHが39度2分の熱を出した。体がビクビクとする毎に目を覚まし、泣いて私の体にすり寄ってくる。私は熱が下がり熟睡できることを祈りつつ、生命を預っている責任をひしひしと感じた。

子育ての真只中で、自分が何かに専念できる時間は、どれだけあるのだろうか。一日の限られた時間の中で、何を優先するかは、その人の価値観、考え方によって異なるだろう。

保育は過程である。母親にとっても過程である。今を子どもと生きる母親は、自分の生き方にかかわってくると思う。十年後、多少とも人間として、母親として、私は成長しているのであるか。ともあれ、数時間後には、また深く考える暇もなく、とめどなく押し寄せてくる子どもの世話の波を、元気に明るく乗り越えていかななくてはならない。